

III 續哀傷篇

一

空見ると強く大きく見はりたるわが圓つよら眼に  
涙たまるも

二

鳥羽<sup>か</sup>玉<sup>は</sup>の天竺牡丹咲きにけり男手に取り涙を流す

鳥羽玉の黒きダリヤにあまつさへ日の照りそそぐ日の照りそそぐ

三

お岩稻荷にゆきて

あまつさへ夾竹桃の花あかく咲きにけらすやわかき男よ

四

木更津へ渡る。海濱に出でて  
あまりに悲しかりければ

いと酔<sup>す</sup>き赤き柘榴<sup>ざくろ</sup>をひきちぎり日の光る海に  
投げつけにけり

松川さいふ旅館に泊りぬ  
白き猫あまたゐたりけり

白き猫あまたゐねむりわがやごの晩<sup>ばん</sup>夏の正<sup>ま</sup>午<sup>ひる</sup>  
近まりにけり

驚きて猫の熟<sup>み</sup>視<sup>つ</sup>むる赤トマトわが投げつけし  
その赤トマト

## 五

あかあかと騒ぎ廻りそ人力車夕日に坐り泣く  
男あり

またぞろふさぎの蟲奴がつのもなり黄なる鶏  
頭赤き鶏頭

## 六

やはらかにロンドンテニースの球光る公園に来て  
けふもおもへる

草の葉に這りちろめく青蜥蜴その兒悲しも夕  
日は光る

七

くつわ蟲を蟬かと思つた  
ひさりひるれの宵のれざめに

かなしければ晝と夜とのけぢめなしくつわ蟲  
鳴くかなかな蛸の鳴く

八

曇り日の朝の瓦の見はるかしを鳩歩み居れり  
さみしきか鳩よ

電線はりに雀とまりてつるみたり悲しかりけりま  
た飛んでけり

九

心心赤き實となり枝につく鴉食まむとすはぢ  
ぎれむとす

暴風雨来りぬ面白きかな面白きかな

柿の赤き實隣家のへだて飛び越えてころげ廻  
れり暴風雨吹け吹け

十

浅草にて

電線に鳶の子が啼き月の夜に赤い燈が點くび  
いひよろよろよ

なになれば猫の兒のごと泣くならむ鳶とまれ  
り電線の上

## 十一

河岸あるき

横網たなに一錢蒸汽近づくと廻るうねりも君おも  
はする

見れば乞食かたみは腐れ赤茄子あかかきをかいつかみひたぶ  
る泣きて食くらふなりけり

小犬二匹石炭舟いそねのふなべりを鳴けり狂へり夜  
に叫び居り

ぬば玉のくらき水の面おもを奥ふかく石炭舟のす  
べりゆきにけり



十二

冬來る

十一月は冬の初めてきたるとき故國くにの朱アカ纒マシの  
黄にみぬるとき

曉々とひとすぢの水吹きいでたり冬の日比谷  
の鶴のくちばし



IV 哀傷終篇

一

かなしみに顫へ新たに  
はぢけちるわれはキヤ  
ベツたまの球たまならなくに

二

くるしくるし堪へがたし

わが心ただひとすぢとなり  
にけり笛を吹け吹  
けさんぼがへれよ

ひとをどりひやるろと吹けば  
笛の音もひやる  
ろふれうと鳴るがいとしさ

三

思ひ出のひまつふたつ

代々木の青<sup>あを</sup>解<sup>か</sup>がもとに飛びありく  
白<sup>しろ</sup>栗<sup>り</sup>鼠<sup>す</sup>のご  
とく二人<sup>ふたり</sup>抱きし

春くれば白く小<sup>ちひ</sup>さき足  
の指かはゆしと君を抱  
きけるかな

手にぎりてかたみに憎み尊菜じゆんさいの銀の水み泥どろを見  
つめつるかな

死ぬばかり白き櫻に針ふるとひまなく雨をお  
それつつ寝ぬ

蠟燭をひとつ點ともして恐ろしきわれらが聞きをう  
かがひにけり

その翌朝あしたあさ君とわが見て慄おそへたる一寸坊が赤き  
足藝

## 四

奮ふる歡かんささごめがたし生はかたく死はやすし

ひなげしのあかき五月さつきにせめてわれ君刺し殺し死ぬるべかりき

## 五

男泣きに泣かむとすれば龍膽りんだんがわが足もとに  
光りて居たり

このかなしき胸のそこひゆこみあぐるくるめ  
きの玉は鐵の玉かも

## 六

來て見れば監獄署の裏に日は赤くテテツブツ  
 プと鳩の飛べるも

囚人の泣く聲か拷問の叫びか

と見れば監獄署裏の草空地くさあきちにぶらんこの環くわんの  
 きしるなりけり

## 七

野邊あるき

氷閉ぢ野菜つめたき冬のみちゆけどもゆけど  
 も人に逢はなく

煤烟すすけむりたなびくもとに葛飾かつしかの青菜畑あさなははるばる  
 と見ゆ

八

夜ふけて

ぐろきしにあつかみつぶせばしみじみとから  
紅くれないのいのち忍ばゆ

時計の針いぢIとIとにきた來るとききするごとく君をお  
もひつめにき

九

母の云へらく

どれどれ春の支度にかかりませう紅あかい椿が咲  
いたぞなもし

十

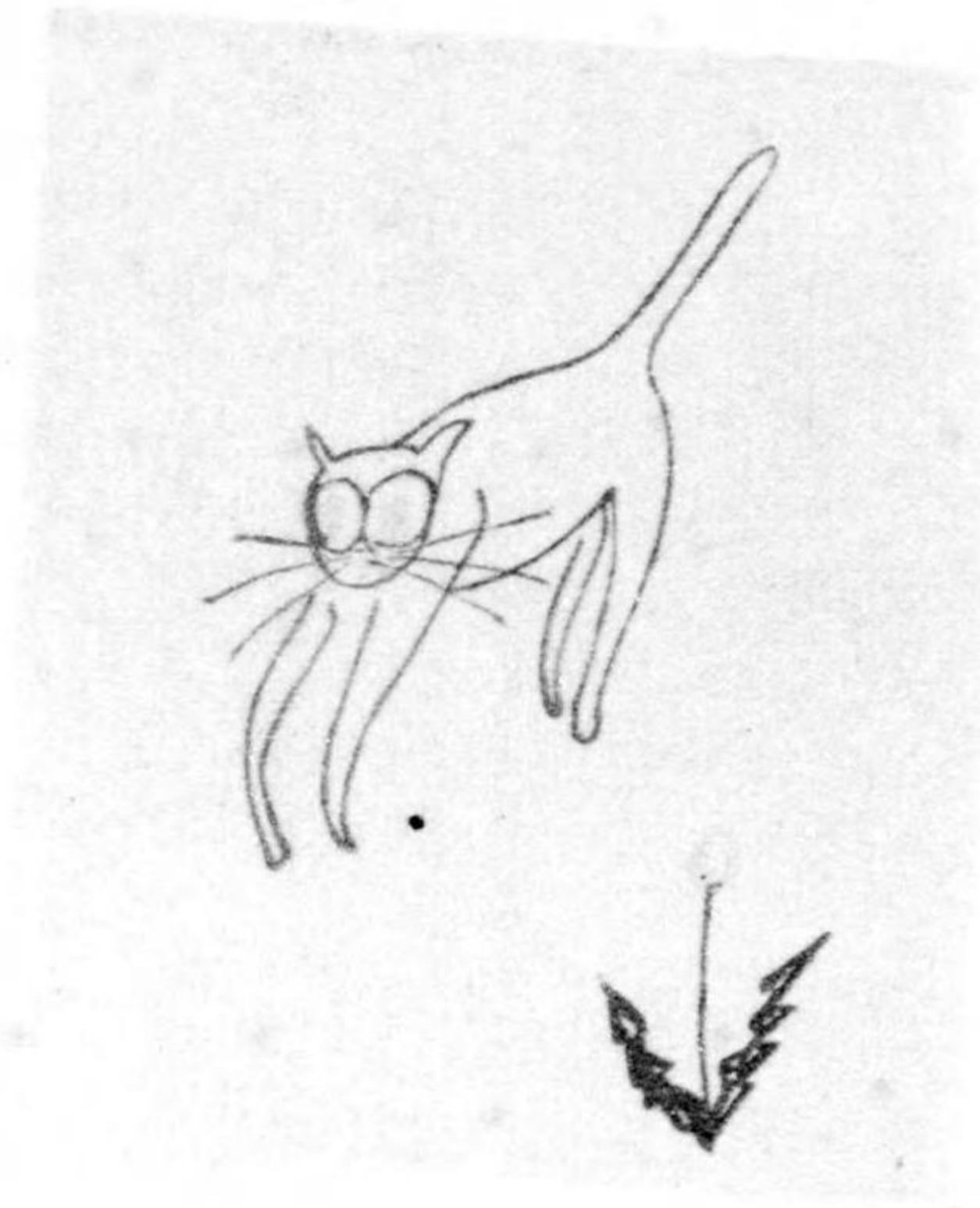
あかんぼを黒き猫來て食みしといふ恐ろしき  
世にわれも飯食む

犬が啼き居り乾草のなかにやはらかに首突き  
入れて犬が啼き居り

十一

ひもじきかなひもじきかな  
わが心はいたしいたしするどにさみし

吾が心よ夕さりくれば蠟燭に火の點くごとし  
ひもじかりけり



猫白



いかにも惱ましい晩だつたと思つた。歩<sup>あ</sup>行<sup>る</sup>いてゐるこまるで自分の身<sup>み</sup>體<sup>だ</sup>が蒼白いセンジュアルな發光の中にひきつつまれて匂のふかい麝香猫か何ぞのやうに心までが腐爛してゆくかと思はれた。

霧、霧、濃密な深い麻醉の雰圍氣に新鮮な瓦斯が光り、電燈がぼやけ、アーク燈が濡れた果實のやうに香氣を放ち、葉柳のかげに、舗石に、店

々の飾窓シヤウウインドウに、さまざまの光澤と陰影とが入り亂れて息づかひ深く霧が愈ふりそそぐ。行きかふ人かげ、馬車や自動車の燈のくるめき、電車の鐸たまが今はぼかされ掻き消されて、ただ不可思議な恍惚と濃厚な幻感とが恰度水底のキネオラマのやうに現出する。

その底を私は歩あ行るいてゐた。たとへ無罪になつたにせよ、かりにも人妻と牢獄に墮おちた私、敗徳者、——私は深い心に泣き乍ら幻想の燈ひかけに弱つた身體からだを勞あつてゆく、潤うるつた霧がそこにもここにも重い層をなし

て私の身邊を壓へつける。夏帽子の麥稈、啣くはえたパイプの火、冷たい目、耳、終しまひには背後うしろから肩に手をかけ、咽喉のどを絞め、剩へ甘いものの腐れた匂さへ病ましい兩の頬つべたに吹きつける。而も耻と悲哀に弾はぢぎれさうな胸を抑えて、怖おそ々と人目を忍んで歩あるいてゆく切りつめた今の自分の心にも何時しか忘れはてた淫蕩な罪の記憶が泣かむばかりに芽はざしてくる淺間しさ。白い霧の中に立つて振り返ると、白い尻尾でも動くやうに足元から怪しげな影が逃げてゆく、向き直つてそつと歩み出すと重い霧の層までが又ふうわりと後から白くからみつく。眞白な獸けもの、私は顫

へて自分の身體がさうした陋しい不思議な白い獸に變化してゆくのではないかと思つた。苦しい、苦しい、まるで獸芝居に出てくる白猫の役者のやうに初めは白い毛皮の身のまはりを嘲笑つてゐた人間の浮かれ心までが、遂には眞實に淫逸な四足獸の惱ましい悲念に歸つてゆくのではないかとさへ思はれる位、霧は怪しくふりそそいでくる。私は心の心に泣きながら、痛さに腫れた乳の上をしつかと抑えて、折々不氣味な若い白痴の女のやうに自分の背後を振り返つた。そのうちに何時の間にかやら重いたざたざしい足ごりが泥酔漢めいて來て、時とするとその痛い乳の上か

ら眞白な畜生の手でもふいと飛び出しさうなそんな氣がしてただもう恐ろしく、抑えては引つ込ませ、抑えては引つ込ませ、益々深い濃霧の中をあてごもなくまぎれ込んで了ふのであつたが……。

たがもう、時が過ぎた。

夜が更け、空が霽れ、蒼褪めはてた經驗の貴さと冷たい靈性のなやみを染々と身に嗅ぎわけて、哀傷のけものは今深い闇のそこひからびやうびやうと聲を秘めて鳴き續ける。將に午前二時半、夜明前三時間、拭き

すました紫檀の机に鏡を立て、つくづくと険しくなつて了つたわれとわが顔をちつと凝視めてゐた私は心の底から突きあげてくる悲しさど狂ほしさから、思はず傍にあつたグロキシニアの眞赤な花を掴みつぶした——鏡の中に一層強く光つてゐた罪惡の結晶が血のやうに痙攣んだ五つの指の間から點々と滲み出る。引き裂き、かき捲りながら緊張しきつた心がまた遺瀨もなく啜泣く苦しさ。幸に獸ともならず迷うて迷ひぬいて、やつと夜ふけに靜觀の境地を得た私の靈魂はまた少らずわれと驚かされて、そつとまた鏡の中を透かした。哀れな腫が狂氣したやうな額

の下からちつと此方を見てゐる。私は怦然として乳の上を抑えた、白い手の芽も飛び出さなかつた、と思ふとちつと黙んだ唇が稍安心と憎惡の薄笑ひを浮べる。

夜が愈更けた。發作の後の悲しみが又犇々と迫る、深い恐怖に顫へ乍らグロキシニアと冷たい鏡を片よせて、私はまた新らしく顫へ初めた素つ裸の感覺から眼を凝らし、耳を聳て、まるで匍ひつくばつた生蕃の兒のやうに生々と暗い闇の核心を凝視めた。

こほろぎが鳴いてゐる……あれほど執拗く人を苦めた白い濃霧の集

團までがもう微の毛ほどの細かい初秋の噉り泣きとなつて消え散つて了ひ、靈岸島の瓦から瓦へ、ただ幽かに薄明るい露の潤りがチラチラと夜光虫の漣波の如うに私歇的里の蒼い光をすべらし、取り残された彼方此方の陰鬱な重い土藏の廂合から今はまたセンチメンタルな緑色の星の影さへ一つ二つと燦めき初める、ホフマンスタールの夜の景色、暗碧な空の心——こほろぎまでが恐ろしいお岩稻荷の物かげからまるで小さな硝子玉でも磨り合はせるやうに絶間もなく感覺的な噉り泣きを續ける。

——苦痛と羞辱とに惨たらしく心のデリカシーを傷けられて神経は愈

鋭く知覺は彌が上に冷たくなつてゆく私の現在にもなほ哀しみ極つたかういふ法悦のひと時はある。さり乍ら、緊張し盡した今日此頃の感傷の鋭さは殆どその極度に達してゐる。苦しい、今のやうな切迫つまつた生活があと三日と續いたなら私は狂氣するか、自殺か、それとも疲れはてた肉體自身がそれより以前に脆い破滅を持ち來すか、何れにしても私の生命は長い事はない。目下の錯亂した官能には最早や鱗虫と蝸と、隣家の自鳴鐘ときりぎりすとの區別さへつかぬほど晝と夜とが顛倒され、色觸の世界にも何時しか夏と冬とが入れ代つて了つてゐる。剩へ日が血の

やうに西からのぼり、月が痺れて東へ落ちかかる怪しい神経病者の幻想  
さへ時折発作のやうに靈自身を憎やかす。

今もこほろぎが鳴いてゐる。私はちつと坪庭の闇を透かしながら、そ  
こに如何なる罪惡が企まれつつあるか、如何なる草木昆蟲の感覺が又か  
ういふ深夜の心に冷笑し、惑溺し、干涉し、聲もなく歎歎し流涕するか  
に耳を傾けた。それがよしや暗黒の中に各々幽かに萬物照應の理順を秘  
してゐるとはいへ、鋭感な今の私には松の葉が如何に光り、櫛が如何に  
戦慄し、雪の下が如何に肺病の蒼白い皮膚を滑らかな苔の上に擦りつけ

るか瞭然感知し洞察する事が出来る。

沈黙が一しきり續いてゆく。

ふと異しい物音がした、キキと何かを引つ搔くやうな、………と思ふ  
とまた性急に、然し怖々と、否寧ろ時折は粗雑に四肢で引つ搔きちらす  
悪戯な爪の響——それが絶間もなくキキとキキと續いてくる。畜生奴！  
私はつと立つて電燈をバツとその方へ向けた。薄緑色の生絹の笠を透か  
して青く漉されたオスラムの燭光が二階から出窓を斜めに暗い隣の屋根  
へさつと射す。私はちつと注意深くその方へ眼を注いだ。

何といふ悲しい光景シーンであろう、そこには不意の輝きに驚かされた柿の木が眞青に顫へ上つた、と思ふと、濡れた葉とまた眞青な果の簇むらがりがキラキラと私の眼を射返した。何たる神秘、落ちついた眞青な輝き……暗い深夜の秘密に密醸された新鮮な酸素の噓うそびが雨後の点滴てんてきと相連れて、冷たい靈性の火花も今眞青に慄おそき出した。……その下に猫がある。白い小さな猫がある。青い葉かげを透かして、緑青色に燦きらつき出した新らしいコールタア塗の屋根の傾斜面からはつと驚いたやうに此方こちらを眺めてゐるではないか。——顫へる如ごとに白い華奢きゃしゃな身を竦すくめ、背を聳て、ただち

つと青い射光の一點を見上げたまま、退のくにも退かれず、全身の悲哀と恐怖とをたつた二つの金色の瞳に集めて、吸入るやうに前肢まえあしをそろへた、あの眼、あの眼、あの切迫せつぱく詰つた眼の光、……ちつと凝視みつめめてゐるうちに私の瞳は未だ曾て見たことのない皮肉な微笑と燃え上る憎悪と怒りに顫へて來た。

二つの靈がひたと今向ひ會つてゐる。而して各々の急所急所をきゆつと凝視みつめめて、痛ましいほどの凌辱を相互に續ける、その恐怖おそれと、憎々しさ、私は電球の尖をキツと差向けたまま、まるで青ざめはてた大刀の魚

のやうに立ち竦んだ。

ふと、ある苛酷な夢の記憶が私の胸の底から突き上げる。

\*

それは今朝ほど（もう昨日の事になつたが）の夢に見た、夢とも覚えぬほどの確に而して冷酷な一喜劇である。

夢は幽かな金線の顫へから初まる。ただ蒼い幻の中の出来事である。冷たい何かの切石の上に、幽かな薄玻璃の鏡の如に坐つて居た私の前に何時からとなく現れてひたと一列に座つた八九人の兒供がある。うち

見るところ七八歳から十五六歳までの頑是ない稚兒の時代から既に物心ついた少年期の成人しきつた顔容の奴まで、それがたつた一人の生長史をまざまざと見せつけられるかと思はれるまで、眼の大きい、額の廣くつて青い、鼻の尖つた、何れも寸分違はぬ、小賢しい面色をしてゐる。而してただちつと私を凝視めてゐる。蒼い光が何處からともなく其奴らの横顔に射しつけると恐怖とも驚異とも、悲しさとも怪しさとも何とも名状し難い冷たさが犇々と私の身邊に詰め寄せて來た。暫時誰一人口を開くものがない。遠くで幽かにチリツンチリツンと一絃の金線をつまぐ



る音色がする。

『ごうぞその兒を引き取つて下さいませんか。』

私は悸然とした。聲がしたのである。確かに、それが聴き覚えのある聲である。人間の聲とも畜類の呻きとも、又は草木の叫びとも、何ともつかぬ、冷酷な、それでなほ偏に絶り付くやうな、さうかと思ふと又心から人を見くびりせせら笑ひ影の影から操かし瞞らかすやうな、一度聴いたら逃れる事も忘れる事も出来ない、何かの深い執念と怪しい魔力を秘めた聲音である。

『たつた一人で宜しいのです、ごうぞ何奴か拾つて下さいませんか。』

聲は何處からともなく追ひ絶るやうに續いた。愈媚びて愈悲しげな哀訴の裏には切つて放した残忍と詰詐と苦しい蠱惑とがある。私は慄へた。而してただちと一列の子供達を凝視めた。同じやうな冷たい顔がちつと同じやうに此方を眺めてほろりほろりと圓らな大きい眼の底から涙を流してゐる。私の頬にもほろほろ涙が流れてきた。

チリツンチリツン……金の絃をまさぐる音色がする。

その聲は何處からした？ 私は其奴らの背後を差覗くやうに幾度か蒼

い光の中を透かして見た。猫兒一匹のさうにもない。ただ置いてきばりにされた幼い靈が泣いてゐるばかり、金の絃の顫音さへはてはやんで了つた。

憐憫と憎惡とが犇々と迫る。私はさうしてゐる内にこの中の一人をどうにでもして引き取らねば濟まないやうな恐ろしいある魔力の壓迫と切實な愛情の罨わなに引き墮されて了つたやうな氣がする。もう一度怪しい聲がしたらどう爲やう、あれかこれか、眞蒼な私の眼が列の端から端までずつと見渡すと、一緒にその大人まかせた陋しい、眼の大きく額の白い子供の

顔がさも恨めしさうにはろほろ泣いてゐる。

私は愈切迫詰つぎつたと思つた——然し聲はそれつきり、いくら待つても待つても誰も何も云ふものがない。次第に恐ろしい沈黙と突き放されたやうな寂しさが切々と私の心を襲ふて來た、恐ろしい、どうにかして逃げ出したい——

チリツンチリツンとまた金の絃を弄ぶ響がする。

私ははつとして、電燈の栓ねじをひねつた。と一緒にかさかさと慌てて逃

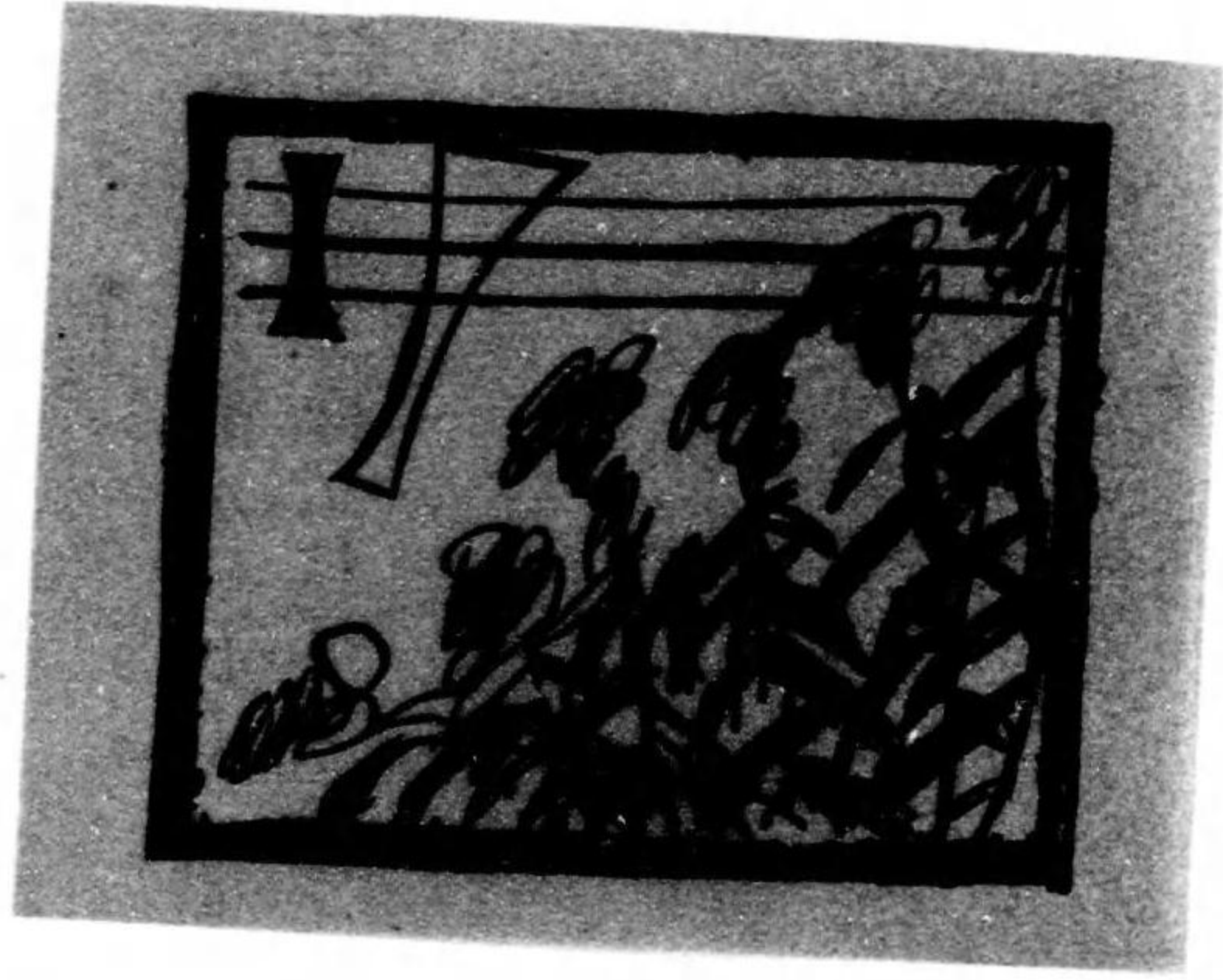
げてゆく物音が、眞闇まつくらに掻き消された。亜鉛屋根から忍びがへしに飛び下り、忍びがへしから板扉の裏を轉がるやうに這り落ちるその迅さ、慌ただしさ……

逃げたな、畜生！ ほつと吐息をついた、私は今、眞闇まつくらな向ふの路次口に轉がり落ちて逃げてゆく猫の滑稽な動作を想像した、而して急に勝ち誇つた感情の弛緩さかと陋ささしい皮肉な冷笑とが多少の可笑おかみをさへ交へて私の心に突き上げてきた。私はまた何となく軽い安堵を覺えた、而して更に注意深く幽かなその夜明前の微光を透かした。

夜は益々更ける、而してこほろぎがまた恐ろしいお岩稻荷のかげから冷たい硝子玉をすり合せて鳴きつゝのる。

再び電燈をバツと點けた時、私はそこに初めて信實な柿の木の姿を見る事ができた、新らしい悲哀かなしみと驚異おどろき、まだ固い眞青な柿の實はキラキラと厚い葉の簇から銀と緑を射返し、あの華奢な白猫のゐたあたりには、ただ空しいコルター屋根の斜面だけが今まるで青硝子のやうに上り輝いて、葉末に残つた露の點滴のみ幽かに光つては消えて落ちた。

こほろぎが鳴く。



蟲のざさふ

私はまた静かに寂しい闇の核心を凝視<sup>みつ</sup>めながら、更に新らしい靈魂の薄<sup>フワライト</sup>明を待たねばならぬ。

大正元年八月二十六日午後四時過ぎ、俺は今染々とした氣持で西洋剃  
刀の刃を開く。庭には赤い鶏頭が咲いてゐる。細い四角の西洋砥石に油  
をかけ、ぴつたりと刃を當てると、何とも云へぬ手あたりが軟かな哀傷の  
迂りを續ける。奇異な赤い鶏頭、縁日物ながら血の如な鶏冠の疣々が怪  
しい迄日の光を吸ひつけて、じつと凝視めてゐる私の瞳を狂氣さす。

鶏頭、汝はまるで寂寥と熱意との一揆のやうだ、何時でも汝の集團さへ見ると俺の氣分が鬱ぎ出す。

餘程眠りこけて居たのか、晝寐から俺が覺めた時にはもう誰一人家内には居なかつた、晝間の活動でも見に行つたものと見える。而して俺一人が裝飾も何にもないガランとした下座敷にぼつねんとかうやつて坐つて居る。何にも爲る事がない、ただもう倦怠るい、仕方が無いので妹の鏡臺を縁側に持ち出して又かうやつて剃刀の刃を當る。鶏頭が莫迦に光

る、それかと言つてくわつと光つた外光の中に何かしら厭な陰氣さが嘲笑つてでもゐるやうに、赤い鶏頭が眼に染みる、莖が戦ぐ、その根元から小さい蜥蜴が走り出す。

何處かで御大喪中の忍びやかな爪弾の音が洩れる。晝の三味線、赤い鶏頭、それが眞赤に陰氣にこんがらがると、今度はまたお隣のお岩稻荷から恐ろしいお百度参りの祈願と呪咀との咽び泣きが絶間もなく俺の後腦に鋭い映畫の閃光を刺し通す。

Gen-gen, byō-soku-byō, …… Gen-gen, byō-soku-byō, …… お岩稻荷大明神様……南無妙法蓮華經……

日が光る、くわつと暑い空気が淀む、鶏頭が笑ふ……石鹼を剃毛で掻き立てて顔一面に塗りつけると、白子のやうに眼ばかり青く光り出す。剃刀をびたつとつけてすうつすうつと泣かせると寂しい心が無性に晴々する。

それでも鶏頭、鶏頭、俺は悲しい。

眞赤な歇私的里の鶏頭、

お岩稻荷大明神様……

不圖、俺は氣がついた、何といふ坐り態だ、まるで汝の肉體は白痴の女見たいにぶくぶくだねえ、だらしのない、ごんなに暑くたつて、もつとチャンと坐つておるでなさい。

眼が鏡の中で笑ふ、剃刀が咽喉の薄い皮膚を切る、危ない、グツと突つ込んだら汝は其儘寂滅だ。

——<sup>あにき</sup>哥兄や二階<sup>で</sup>で木遣の稽古、音頭取るのがアリヤ良人<sup>うちのひと</sup>エンヤラナ

……

「にどにとど石鹼が指さきに流れる、氣味の悪るい、冷たい、かと思ふと何處かで忍び笑ひの聲さへ聽へる、三味線が急にはしやぐ、

……エンヤラヤレコノサア……サノセーアレワサエンヤラナ……

唄ごころかい、

俺は苦しい、苦しい、鶏頭、真赤な鶏頭、

日が光る、お百度参りが泣く、俺の後腦が真赤に<sup>またた</sup>瞬く。

露西亞の所謂トスカではないが、今日此頃は鶏頭さへ見ると俺のふさぎの蟲がしくしくと腹の底から募り出す。

Gen-gen, byō-soku-byō……Gen-gen, byō-soku-byō……お岩稻荷大

明神様……南無妙法蓮華經……ごうぞ旦那との縁が切れますやう

に……

恐ろしい、<sup>まっぴらさま</sup>真晝間に何事だ。

おやお前さんは泣いてるね、鏡の中で泣きつ<sup>つら</sup>面するのはお止<sup>や</sup>しなさい



鼻でも剃り落したらどうします。

鶏頭、鶏頭、眞赤な鶏頭。

まだ汝はあの女に未練があるのかいと俺の眼が剃刀の下からにつと笑ふ。

一生の戀だ、命かけての愛だの信實だのと云つた蜜の如ないつかの抱擁も千言萬句の誓ひも歡語も、但しは狂ひに狂つた欲念の焰も、ただ一息に押しこかしてゆく「時」の力の前には何等の矜持も權威もあつたもの

では無い。時は過ぎてゆく、而して凡てが何時となく傳奇的な美しい幻想の色彩の中に掻き消されて了ふ……

ほつと吐息をして眼を瞑る、剃刀が頬邊に冷やりと沁る……怪しい罪惡の秘密と淫蕩な官能の記憶とが轟々と俺の胸を掻き捲る……

も一度逢ひ度い……ハツとして眼を開けた、嘲笑ふやうに鶏頭が光る。

ほんごにあの鶏頭のやうな女だつた、お跳さんで嘔吐きで伶俐で愚かで虚榮家で氣狂で而して恐ろしい惡魔のやうな魅力と美しい姿……

凡てが俺の藝術欲を嗾かし瞞らかし、引きずり廻すには充分の不可思議性を秘して居た、縦へ、それが代々木の草原を飛びあるく白栗鼠の兒のやうに或は陋しく或は輕浮であらうとも俺にはまた却てその無邪氣と痴態とが萎らしくも亦憫らしく思はれたのだつた……そればかりか俺も亦釣られて栗鼠のやうに飛びあるいた……而して遂には二人とも監獄に墮ちて了つた……兎に角……と又右の眼が熟と靈魂に喰ひ入るやうに覗き込む……汝達はあまりに夢想家だつた、殊に汝は現實そのものの生活をあまりに藝術に爲過ぎた……さうだ、それに違ひない

悲しい左の眼がうなづく……汝が今日のやうな惨めな世間の侮蔑と壓迫を蒙るのも當然だ、道ならぬ戀は一度は破滅する、美しい幻影も遂には破れる……さうだもう幻滅だと又左の眼が切なさうに差し覗く……初めそれほごにもなかつた汝が奈何して又あんなに急に夢中になつて了つたのだ、と右の眼が剃刀の下から嘲るやうに喰ひ入つてくる……それは俺にも解らない、只俺の藝術至上主義が俺自身を妖艶な蠢惑と幻感の世界に昏睡さして了つたのだ、罪惡がそこで醸された、つくづく俺は俺の魔法の空恐しさを知つた、而して女の美しさを……啜り泣くやう

に左の眼が光る。……誇張してはいけくない、一體どちらが悪者なのだ、世間では汝の方が正直過ぎた、畢竟擬寶玉を買被り過ぎた、もつと薄情におひやらかして逃げて了へば何でも無かつたと云つてゐる。……有難う、警察でも監獄でもさう訊かれた、一體汝達はどちらから先に手を出したのだと、……双方の眼が一時に苦笑する……さういふ上品な世の中だ、疑はる可くして初め疑はれ、待ち設けた最後の罠に墮つ可くして的確に二人とも墮ちた、而して結末も至極簡単に解決した、それで可い、それで可い、二人のやうな罪囚の痴態はただ美しい傳説の中にのみ

生甲斐がある。もう何事も訊いて呉れるな、……フフン、それではこれ位に切り上げやう、何れにしても汝は莫迦だ、飛んでもない阿呆だ、罪人だ、氣狂だ……さうだそれに違ひないと兩の眼がじつとうなづく……カラカラチーン、チーン、チーン、チーン……氣まぐれな隣の自鳴鐘がもう夜の十時を點つ、夕日がくわつと壁から鏡に照り反す。鶏頭が恍惚と息をつく、風が光る。

「そばからくと起る残念な事、口惜しい事、迫害、いろくの事情

にせめられて平常からきかぬ氣の私はとりつめました、自殺と覺悟をきめました、然しここで死ぬのはいや、今一度お目にかかり度い〜……はつとして後を振り向いた、誰もゐないガラソとした部屋の天井にただ手水鉢の水が斜めに水陽炎を投げてゐるばかり、ちらちら動く、光る、影と影とが逃げてゆく、追ひ廻す……

また向き直ると晝の恐怖が寂として後からそつと髪の毛を引つ張る。「あなた此まま私を放つてお置きになるのですか、純様、ああ純様、戀しき戀しき純様、はやくはやく私を助けて下さい、逃げて下さい、苦

しい残念、口惜しい、只一人の姉の同情で——いづれ〜私逃げ出します、近いうちにさうして自殺します。」

狂氣のやうな女の姿が眼に見える、俺もあの時は夢中だった。苦しかった。而して机の上にあつた眞赤な眼無達磨を思はず抓みつぶして硝子に擲きつけた、また飛びついて小刀でグザとその白眼玉を刺し通した。さうだ、さうだつたに違ひない。

「私は覺悟致しました、決して〜あなたまで死んで下さいとは申しません、死んでもいい、どうぞ私を引き出して下さい〜。」

追っかけてまた手紙が来る、俺も火のつくやうに旅行支度をする、それでも待てないであのお跳ねさんは到頭身體がもう變だ、見るものも見なくなつたと云つて寄越した、かと思ふとその手紙より先きに大和の笠置から鵲の立つやうに飛んで来た。

南無三！……思ひ出しても身體が顫へる……そこにもうちやんと恐ろしい畏が二人を待つて居たのだ、それから俺達は飛んでもないところへ旅行して了つた。

嘔吐き、嘔吐き、眞赤な嘔吐き、俺は何もかも知つて居る、私に切迫せつぱ

詰つまらして愈心中させる氣だつたか、それとも淫蕩な夏の旅行に私を誘おほき寄せやうとしたのかを、ごつちみち二つに一つだ。俺にしるもうあの時はあの女を思ふさま淫逸な欲念と熾烈な死と官能の幻惑の中に引きずり廻すより外に途みちが無いと思つたのだ。

ほつと眼を瞑る、

「私はあなたが憎らしい、あなたは私を世の中から、凡ての人から見はなさせて一人ぼつちになつた後、いちめていちめてつき放さうとなさるに違ひありません、口惜しい、入らつしやい、ここへあの思ふ存分い



まだまだあの女將おかみはやつてゐる。キリキリと砥石ひごあてに一當めてて、じつと聴くともなく刃はを返すとホロリと涙が落ちた。

弱蟲……苦痛と凌辱との思ひ出が切々と蘇る。未決監を出てからもう彼是一と月、その間、日となく夜となく緊張し切つた俺の神経はまるで蠱斯きりぎりすのやうに間斷きりもなく顫へ續けた。狂氣と錯亂さくらんとがもう俺の目前に赤く笑つてゐる。さもなくとも俺は短命だ、ただ一息に俺は俺の息の根を吹き續けるより外に仕方がない。

Gen-gen, byō-soku-byō……Gen-gen, byō-soku-byō……

苦しい、苦しい、奈何どうかしてくれ、眞赤な地獄繪の映畫フィルムがキラキラキラキラ俺の後腦ごうに烙くわきつく。ふさぎの蟲がしくしく募る。

ワンヅワースの牢獄に初めて謙虚な悲念に掻き暮れ得た驕慢な天才兒の末路は汝おまへにいい訓戒だ。

さりながらあの市ヶ谷の監獄生活は誠に貴い省察と静思との時間おまへを汝おまへに與へたと、鏡の中から悲しげな兩の瞳が熟視みめる……あれから苛酷な世の嘲笑と壓迫は日夜續いた、それでも汝おまへは能く耐え

た、と又剃刀が冷たい汗を額に續ける……

鶏頭、鶏頭、記憶は悲哀を再燃させる。汝が初めて町の安床に行つた時……と又眼が憎さげに顫へる……がらがらと驅けて通つた囚人馬車がまるで汝の頭を轢き潰して鏡一面に黄色く光つて行つた時、あの狎のやうな下司ばつた顔の親方が何と云つた。

「囚人馬車の癖に宮様のやうに威張りかへつてのさばりやがる……一體あんなに幾人乗つてやがるんだらう……あんな罪人なんて奴は何だね樺太三界にでも追放つちまつた方がいいんだ、ねえ旦那。」

その時の汝の顔つたら無かつたせ、「どうせ監獄の御用馬車だ、お客さんはせいせい十人か十一人に極つてゐる、さうだあんな罪人は樺太にでも追放したがいい」汝は顔を眞蒼にして顫へたつけね、それからその翌日は……と又剃刀が眼と眼との間に顫へる……寄席の鈴木で、あの眼のクルクルと大きい厭味な洋服姿の秋月の奴が現在汝のある前であのキザな十題話の落しに面白をかしく間男の意見をして見せた。あの時傍に小さくなつて居た弟が、あの内氣な弟が顔を眞赤にして兄さん兄さんと汝の袖を曳いた。「心配するな、俺はもう何と云はれたつて姦通者に相



違ないのだ、皆が皆寄つて群つて苛めるならもつと苛めろ、もつと苛めろ、一層の事ぐいと銀の槍でも突き通せ。汝の心はもうその時犇と優しい Tinka John の身體を抱き擁めてゐたつけね。又その翌日は………思ひ出しても厭やな暑い日だつた………苦しさ紛れに飛び込んだあの汚い八丁堀の大路次亭では見るからに貧乏臭い瘦せぎすの講釋師が頓狂に顔を顰め乍ら張扇をベタベタと叩いてゐた。而してまた汝の面前でヤンヤと人を笑はせた、………さうだ俺はよく知つてゐる、だらしく晝寝してゐた爺までが齒の無いモガモガの口をあけてフナフナと笑ひ轉けたあの

時だ………へえい、小櫻さんの花魁、ええ、あの花魁は」と頭を搔いて番頭が「實はなんで GES、恰度昨日で年が明けましてな、それで店の吉さんと一緒に國へとか申しましてついさきほご立つて行つたばかりで、へい。」ナニ、國へ歸つた、國、國とは一體何處だア。「へえ、吉さんの故郷とかで。」吉の故郷は何處だア。「と黄色い聲をして、金を貢いで擧句のはてに欺された旗本の野呂馬息子が齒齧みをする。」筑後の柳河ださうで。「筑後の柳河ア。」口惜しさうに聲が泣き出す。「へえ、大分遠方で、何でも長崎の傍ださうで、えつへつへ。」さうだ、如何にも俺の故郷は筑後の柳河

だ、それがどうした。笑ふにも笑はれない、何といふ惨めさだ。汝は思はず敷島の袋をぐいぐい掴みつぶして了つたつけね。

Gen-gen, byō-soku-byō……Gen-gen, byō-soku-byō……お岩稻荷大明神様……ごうぞ御願ひ奉る……

喧ましい、鶏頭、鶏頭、俺の肝の蟲がもう弾ちぎれさうだ。

暑い、暑い、くつわ蟲が啼く、蝸が啼く、くわつと外光が眼ににじむ、陰氣な鶏頭がまた眞赤に心のどん底から笑ひ出す。それなのに何とした

か意久地なしの靈魂がまたトスカ的に滅入り込む、氣が悄氣る。ポロポロと涙が零れる。

不圖眼を落すと、鏡臺の上に空になつた香水の壘が載つて居る、その白いレツテルの腹の上に又小さな一寸蠟燭を立ててある。家内の Pinka Ono でもやつた事だらう、面白い、と一寸妹に感心する、而して又物好きなきな心はその寂しい心の尖にしんみりとマツチを擦りつける、と晝の燭が微かに燃える。鏡の面を少し立てるとその中に聲もなく燭が吸ひ込ま

れる。而して眞晝間だのに俺の心の心が幽かに泣き初める。

汝は我儘だつた、而してあまりに藝術上の趣味なり嗜好なりに贅澤過ぎた。譬へ天真の稚氣と信實とが絶えず心の底に晝の蠟燭の様にもちろろめいてゐたにもせよ、馴れ過ぎた天の恩寵と世の淺はかな賞讃とが何時しか汝の貴重な靈性を盲目にした。怪しい感覺と不可思議な官能の幻感が又汝の肉體を思ふさま翻弄した。

汝は家庭に於ても一種の暴君であつた。それかと云つて汝ほどあの寂しい人々の間から尊敬と愛慕と信賴とを集め得たものはない、汝は七情

の赴く儘に色を換ゆる無邪氣な光のかめれおんであつた。然しまた豹のやうな空恐ろしい愛情の殘虐をも敢てした、また怪しい魔法使ひの鞭のやうに凡ての肩の上に柔にその恐怖と愛憎の吐息とを投げかけた。汝はいかにも優しかつた、温かであつた、然し又氣まぐれで、神經質で、能く怒り、能く苦しんだ。例へばその時折の衣服の調色、ある日の汗の臭などの些細の感覺の不愉快から終日母の傍に坐る事さへ苦痛にしたほど我儘で又驕奢であつた。

然し汝が一日家に居ないと家中の者は皆陰氣な尊榮のそばからふいと

温かな麝香猫でも居なくなつたかのやうに何時も妙に滅入つて了ふのが眼に見える。現在汝の弟は汝の藝術の第一の崇拜者ではないか、剩へ汝の婆やなどはまるで汝一人を神様か活佛のやうに頼り絶つて居る。實際、かういふ滑稽な盲信位難有迷惑な事はない。だがよしや汝が世間から棄てられ笑はれ嘲られても汝の肉親の凡ては汝に縦ついてゆく、而して善かれ悪かれ汝の爲る事には頭くから信じ切つて居る。

何が佛だ、思はず手に持つた剃刀を向ふの壁に投げつけた。キリキリ突き立つてピヤンと跳ね返る。

481 印度の佛と能くあの若い獨逸の畫家に戯けた手付で例も皮肉な禮拜を受けさせられた熱帯系の菩薩面がニコリともせず鏡の中で顛へてゐる。厚い唇が今日には不思議に眞赤に見える。晝の蠟燭が鼻の眞向まうかうにしんみりと光り輝く、眼と眼とが凝ぢつその底から吸ひ付くやうに差覗く………つくづくと陰影と靈魂と睨み會つたまま底の底から自愛と憐憫の心が切々と滲み出る。「ほんとに瘦せた。」ほつと吐息をしてまた俺の氣分もあれから随分變つたものだと思ふ、ごんな苦痛と羞辱とに身を鞭れ曝されても持て生れたデリケエトな誰にも懐かしがられるあの貴い心持丈は少

しも傷けないで居られたと自負する心の裏から、流石に險しくなつた額付や皮肉な口元の痙攣さへ目につく。

ちつとこみあげてくる哀傷の一念を抑えて、刺り立ての眞蒼な面の光澤を冷々と勞ると、暑い夏の日にもしんみりと靈魂の冷たさが身に染みる。

全く誇張された同情や信頼や愛情の過剰な負債には堪へられない、堪へられないばかりか或時は寧ろ嫌悪と反感と冷酷な肉親の呑嚙をさへ感ぜしめる。ごうかして切り抜きたい、獨になりたい、そればかりに俺

は思はず血で血を洗ふやうな殘虐な暴君にもなつた、罪人にもなつた、親不孝者にもなつた。かど云つて俺は俺の貴い靈魂をこれ以上に自ら侮蔑し傷け墮落させる事は出来ない、剩へ俺の肉體を血まみれに刺し貫いて俺自ら陋しい賤民の死體のやうに大道の眞中に放棄り放す譯にはゆかない。俺は俺自身が愛惜い、命が惜しい、死に度くない、況して嘘か眞實か第三者の中傷か、いざとなつたら二人のごちらが罪が重くなるだらうと一時はわなわな顫へたといふ、あの輕薄なお跳ねさんなんぞと一緒に死んでごうなる――

俺が自殺したら無論肉親の一人二人は墓場迄も縦いて来るだらう——これは偽りでない——而してあの女でもひよつとかしたらあの可愛い小さな心臓を今度は戯談でなしにキユツとピンの尖きで突き刺して笑つて眠て了ふかもわからない。然し俺は心中は御免だ——獨で死ぬのももう厭になつた。たつた一人で生き度い、命が惜しい。

それはいつぞやは死なうとも思つた、俺の好きな植物園の薬草花壇で、毒薬を喫んで、あの大蒜びんくの根や、茴香の蕾を抓み散らして、精一杯に苦んで、藻掻いて血を吐いて、而して笑つて眞蒼に腐つて了ひ度い——と

も思つた。然し母迄がおせつかひにも一緒に自殺でも爲さうな氣振に見えたので、急に俺は不愉快になつて、その足で淺草の活動寫眞見に行つて了つた。

毒薬と云へばあの俺がある種類の豫防しほに納つて置いたあの甘汞を、何と間違へたか、蒼くなつて慌てて秘かして了つた俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

鶏頭、鶏頭、俺の弟はほんとに可哀い道化ものだ。

時が経つ………蠟燭の火がちちと幽かに瞬く。

鶏頭、鶏頭、

記憶に悲哀は再燃する、切迫詰つた俺の感覚が四ん匍ひになつて剃刀を拾ひかける、ハツと靈魂が後から呼び返すと意久地もなくバタリと身體が平べつたくなる、苦しい涙がポトリポトリと額を抑えた手の甲に零れる………

嚙蟲が啼く………唐突に座り直して、ぐいと右の指を二三本白粉の瓶

に突つ込む。ぐるぐると掻き廻してべたりと面にぶつつける、………ふさぎの蟲がクスクス笑ふ………狂者、狂者、狂者、まるで汝は狂者だ、慙うして居る中にも頓狂な発作の陰謀が恐ろしい心のどん底から可笑しいほどはしやぎ出す、白粉を水にも溶かさないでべたべた塗りつける、にどにとど面が突張る、眼が光る、見る見る能のお面のやうに眞白に生色のない泣つ面が出来上る。さうでもないか、此奴、解剖學の標本室で見た死刑囚の白い面型その儘だ、さうだあの面型には眉の毛が二三本赤つちやけてくつついて居たつけない——ここまで擲擄つて来て俺ははつと思つた、

能い加減に巫山戯け散らしてゐた靈魂がピタと緊張まる。眼が黒く光り出す、急に恐ろしくなつて粉紅の圓い球をぐいと右の頬邊ににじりつける、と紅い日の丸の烙印が如何にも道化らしくバツと燃え出す、面白い、左へもひとつべたりとにじりつける、あはは、泣つ面がやつと笑ひ出した。立派な戲奴だ、これでひとつ浮かれて退けるか。

活惚、活惚、何處かでまだ三味線を弾いてゐる。ついと立つて紅い道化頭巾を冠る、浴衣を脱ぐ、薄いシャツ一枚になつて、さて眉から鼻、口元と白粉を均す、長い脛毛の周圍を青インキで濃く隈をつける。

隈と云へば未決監では面白かつたな、とクスクス皮肉な笑が咽喉のぐりぐりにこみ上げる。ねえ汝は贅澤だつたよ、牢屋に居ながら二度二度、スープに洋食を三品宛、それに果實は缺かしつこなし、あまり辛氣なので食べ残しの水蜜桃で真紅な自畫像をぬたくりつけてひごく叱られたつけな、あの挿話は誰に聞かしたつて腹を擁えるだろう、この惡戯者はその翌日看守長から鹿爪らしく呼び出された、それはかうだ。「三八七番、この真紅な面は何だ。」それは私の顔で御座います。「何で描いた。」「水蜜桃の腐れたので描きました。」「ちやあこの黄色いのは何を用つた。」俺は



髪かみの毛けをもじやもじやと眞黄色まがねいろになすりつけたのだ。「それはバタで。」  
 「このホチホチ点々まじりは何だ。」それは辛子からしで御座ございます。「青い眼玉めいぼはごうした。」  
 俺おれはつくづく苦笑くわくごうした。「それはサラダを絞しぼりましたので。」一帖いっぺいの半紙はんしを  
 一枚まい翻めくると矢やつ張り下したにも俺おれの眞紅まがねな顔かほが泣なつ面おもてをしてゐる。また翻めくる  
 と矢や張り黄色きいろく滲しみみ込んでゐる、また一枚まいまた一枚まい、矢やつ張り青い眼玉めいぼ  
 が光あかりつてゐる。俺おれははらはらしながら自分の面おもての皮かわでも一枚まい一枚まいひん翻めく  
 られるやうに辛からかつた……  
 ぶつと吹き出して立ち上ると、活惚かふつ、活惚かふつ、三味線さんまいせんが調子てうしをつける。

Gen-gen byō-soku-byō……Gen-gen byō-soku-byō……お岩いわ稻荷いなぎ大明だいめい  
 神様かみさま……南無妙法蓮華經なんぶみょうほうれんげきやう……ごうぞ商賣しょうばい繁昌はんしょう致いたしまするやうに……  
 鶏頭けいとう、鶏頭けいとう、俺おれはもう氣きが狂くるひさうだ。

活惚かふつ、活惚かふつ、甘茶あまぢやで活惚かふつ、鹽茶しほぢやで活惚かふつ、ヨイトナ、ヨイ、ヨイ、……  
 くるくると二つばかりとんぼがへりをする。ガラがらンとした部屋へやの中に、  
 たつた一人ひとり、眞白ましろな面おもてを緊張ひきしめてくるくるともんどりうつ凄せきさ、可笑わかしさ、  
 又またその心細こころこまさ、くるくると戯あそけ廻まわつて居ゐる内に生眞面目なまじめな心こころが益落きまちつ

いて、凄まじい晝間の恐怖が腋の下から、咽喉から、臍から、素股から、足の爪先から、空一面に擴がり出す。

鶏頭が眞赤に眞赤にひつくりかへる。

頭の映畫がキラキラキラひつくりかへる、蝸が鳴く、お百度參りが泣く、三味線が囃し立てる。

活惚、活惚………

三味線がハタと止む………

と、くるくると轉がつてゐる俺自身が俺にももう恐ろしくて恐ろしくてたまらなくなつた、思はず投げつけられた盜賊猫のやうにぼんと起き直るとその儘バタバタと二階に駆け上つた。

晝の蠟燭がまた幽かに取澄まして瞬く。

それから暫時經つて、殆素つ裸の俄作りの戲奴は外の出窓に兩脚を恍惚と投げ出して居た。而して今靈岸島の屋根瓦の波の上にくるくると落ちかかる眞赤な太陽の光を凝と眺めて居る。雲の影ひとつ見えない大空

の果に鳩が火の玉のやうに飛んで居る。煙突の煤烟がくさくさと渦を巻く、電線が光る。

それでも、向ふの土藏の屋根の上に枯れかかつた名も知れぬ雜草がしんみりと戦ぐでもなく戦いでゐるのが眼に付いた、その僅な二三本しかない幽かな草の戦ぎがちつと熟視めて居るうちに、先程の活惚騒ぎで取り落したふさぎの蟲をまた染々とぶりかへす。草が戦ぐ、また意久地なしの靈魂が滅入つて了ふ。悄氣る、鬱ぐ………涙がホロホロと頬つぺたを流れる。

ん、Gen-gen, byō-soku-byō………Gen-gen, byō-soku-byō………

急に寂しくなつて、まじまじと下を向く、とまた生憎な、目に入るでもなく庭の垣根越しに向ふの長屋の明け放した下座敷が見える。

おや、もう電燈が點いて居る。晝間の光に薄黄色い火の線と白い陶器の笠とが充分にダラリと延ばした紐の下で、疊とすれすれにブランコのやうに部屋中揺れ廻つて居る、地震かしらと思ふ内に赤坊が裸で匍ひ出して來た、お内儀さんが大きなお尻だけ見せて、彼方向いて事もあらうに座敷の中でバツと紺蛇目傘を擴げる。かと思ふと何時の間に歸つて來た

のか末の弟が廁の中から博多節か何か歌つて居る。

變だ、何だか何處かで火事でも燃え出しさうだ、空が焼ける、子供が騒ぐ、遠くの遠くで音も立てずに半鐘が鳴る……をや、俺の脳髓あたたままでが黄きくさくなつて來たやうだぞ……犬までが吠え出した……何か起るに相違ない。

南無妙法蓮華經……お岩稻荷大明神様……

苦しい、苦しい、汗が流れる。

恰度こんな暑い日だった、俺は監獄で……と戯奴アヤオカアが面を顰しかめる……俺は監獄であまり監房への臭氣が陰氣なので、汚ない亞鉛の金盃に水を入れて、あの安石鹼あんせきを溶とかしては両手で掻き立て掻き立て、強い弾ぢきれさうな匂を息の苦しくなるほど跳ね散らしてゐた。

真白い細こかな泡と泡とが、緑に、青に、紅に、薄黄に、紫に、初めは紫陽花、終まひには、小さな寶玉に分解して數限りもなく夏の暑熱と日光とに光る、泣やく、泣く、泣く、泣く、泣く、泣く……恍惚うろたと見入つて居ると、コツコツと隣の厚い壁板を向ふで敲く。そこで、俺も泡まみれの手でコ

ツッコつと合圖をして「奈何したの。」と腰をかがめる。

「今日は盆の十六日ですねえ。」と氣のない疲れた聲が投げ出すやうにきこえる。

「さうだ、盆の十六日。」と俺も一寸可笑しくなる。

「もうつくづく厭になつちやつた、ああああ………」

これがこの二月に淺草で友達を殺した男の聲かと思ふと、何となく變な、不憫な、厭あな氣がする。二月から入監つて、まだ一度か二度法廷に引つ張り出されたつきり、まだ刑も極らず、放たらかしにされて居る

のである。飽き飽きするのも無理もない。

暫時黙つて居ると、またツッコつと甘へるやうに背後を敲く。

「何だね。」

「あの翠丸きんたま抓んだら死ぬんでせうか。」

不意に俺の眼が笑ひ出した。

「そりやあね、ギョツと抓んだら何時いつでも死にます。」と口を寄せて、また物好きな道化心が笑ひ出す。

「だが、一體誰だれが抓むの誰の翠丸きんたまを。」

「私が抓あつしむんですがね。」

猫のやうに頓狂な聲がした。

と、思ひ出すと、取り澄ました俄ヂヤオカア作りの戯奴ヂヤオカアが一時に眞白な顔の造作を破裂さした、ははははは、自分でも吃驚びっくりするほどの大きな聲を擧げ乍ら、腹を擁擁えて出窓から疊の上に轉げ廻つた、而して又轉げ廻つてく世界  
中がひつくりかへるやうに笑ひ續けた。

はははははは………  
はははははは………  
はははははは………

### 桐の花目次

#### 歌

#### 銀笛哀慕調

I	春	………	二七
II	夏	………	五一
III	秋	………	六三

IV 冬.....六七

初夏晚春

I 公園のひささき.....七五

II 郊外.....八一

III 庭園の食卓.....八五

VI 春の名残.....九五

薄明の時

I 放埒.....一二五

雨のあともさき

II 踊子.....一三九

III 浅き浮名.....一四五

VI 蟾蜍の時.....一五三

V 猫と河豚と.....一五九

VI 路上.....一六五

I 雨のあともさき.....一七七

II 晝の鈴蟲.....一九五

秋思五章

I 秋のおまづれ……………二〇七

II 秋思……………二一三

III 清元……………二一九

VI 百舌の高音……………二二五

V 街の晩秋……………二二三

春を待つ間

I 冬のさきがけ……………二六一

白き露臺

II 戯奴……………二六九

III 雪……………二七三

IV 早春……………二八五

V 寂しきごち……………二九五

I 春愁……………三〇五

II 夜を待つ人……………三一五

III なまけもの……………三二三

IV 女友ごち……………三二九



V 白き露臺……………三三七

哀傷篇

I 哀傷篇序歌……………三六一  
 II 哀傷篇……………三六七  
 III 續哀傷篇……………三九五  
 IV 哀傷終篇……………四一一

小品

桐の花とカステラ……………七  
 晝の思……………一〇一  
 植物園小品……………一四一  
 感覺の小函……………三四七  
 白猫……………四二五  
 ふさぎの蟲……………四四九

屏繪 挿繪

桐の花とカステラ ..... 七  
 たんぼ ..... 二五  
 葱と紫蘇 ..... 六九  
 螢 ..... 一〇一  
 道成寺 ..... 一二三  
 銀座 ..... 一七五  
 上海 ..... 一九七

欄書

ココア外二十種

泪芙蓉と磁石 ..... 二四一  
 雪 ..... 二五九  
 白き露臺 ..... 三〇三  
 露のおきふし ..... 三四七  
 鳳仙花 ..... 三五九  
 白猫 ..... 四二五  
 晝の三味線 ..... 四四九

## 集のをはりに

數少きわが歌の中より、選びて僅に四百餘首を得たり。わが歌はかの銀笛  
哀慕調のいにしへより哀傷篇四章の近什にいたるまで、凡ては果敢なき折  
ふしのありのすさびなれども、今に及びては舊歡なかなかに忘れがたし、た  
だ輯めて懐かしく、顧みて哀愁さらに深し。

處々に挿みたる小品六篇のうち、「桐の花とカステラ」「晝の思」の二評論は  
時折のわが歌に於ける哀れなる心ばえのほどを述べたれども、そはわが今  
のつきつめたる心には協はず、ただ詩のみ餘情のみ、うはかはのただひさふ  
れのみ。

わが世は凡て汚されたり、わが夢は凡て滅びむさす。わがわかき日も哀樂  
も遂には皐月の薄紫の桐の花の如くにや消えはつべき。  
わがかなしみを知る人にわれはただわが溫情のかぎりを投げかけむか  
な、四人 Tonka John は既に傷つきたる心の旅びとなり。  
この集世に出づる日ありとも何にかせむ。慰めがたき巡禮のそのゆく道  
のはるけさよ。

この心を誰か悲しく弄ばむやんごさもなし  
やんごさもなし

一九一二、初冬

著者

桐  
の  
花  
を  
は  
り

大正二年一月二十二日印刷  
大正二年三月五日發行

正價金壹圓

版權  
所有

著者 北原白秋

發行者 西村寅次郎

京橋區南傳馬町三丁目十番地

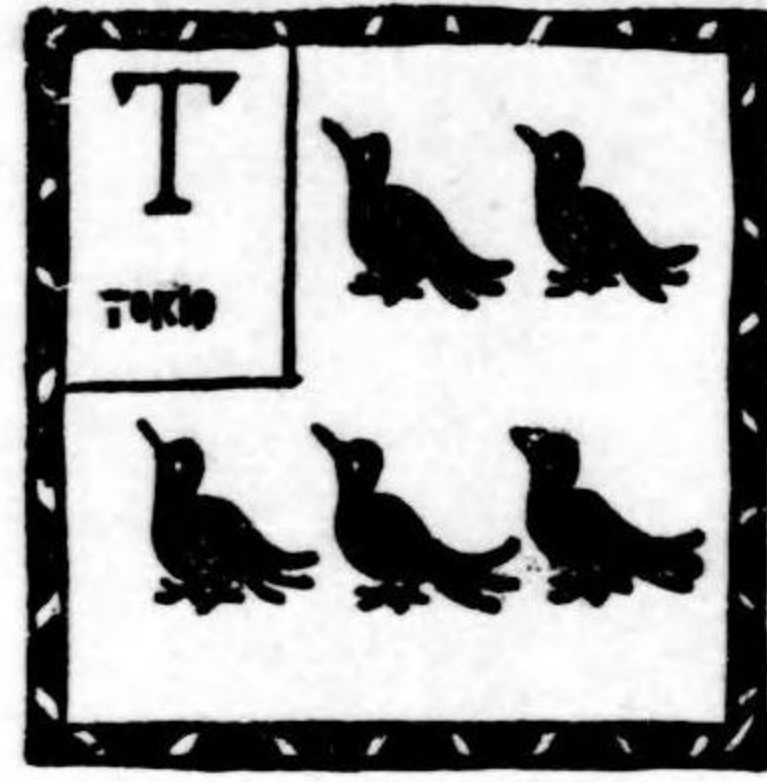
印刷者 佐藤保太郎

京橋區新榮町一丁目二十一番地

發行所

東雲堂書店

東京市京橋區南傳馬町三丁目十番地  
電話京橋一六三九番振替五六一四番



272

485

終

